

『キンダーブック』のこと

森下 はるみ

幼児の頃の絵本といえば『キンダーブック』であった。横長の本にいつも二つ折りにくせがついていたので、和歌山の南端近い小さな町まで、はるばる郵送されてきたものちがいない。六〇年も前のことなので、確かめようにも父も母もすでない。

「この女の子 きらいや Fやんに似てるもん」と本をめくりながら姉がいう。妹たちもそれに同調して、新しい絵本の女の子をくさすのが常であった。Fさんとは、近所の父子家庭の姉のほうで、母親がいない分、子どもながら炊事や洗濯を

よくやっていた。父親が、近所の頼まれ仕事や百姓の手伝いを不定期にひきうけることで生活していたが、その無口な男が、時々、爆発的に子どもを折檻するのである。子どもたちが裸足で逃げながら泣き叫び、父親の怒鳴り声と子どもの泣き声を通りにもひびきわたる。そんなFさんの貧しさ、突如あらわれる恐ろしい修羅場、それなのに次の日には何もなかったかのようにふるまっている不可解さが、子ども心にFさんというより、Fさんの環境に拒否感をもたせたのだろうか。

故郷の家を処分したとき、三日ばかり、いろいろな物を燃やしつづけた。そのなかに、あの頃の『キンダーブック』もあった。けむりにむせながら、ページをめくっていると、顔のところを、鉛筆で無残によごされたあの女の子の絵があらわれたのである。星空のような美しい幻想のなかに浮かぶ、細い釣り目の女の子、明るい花の中から顔をだすほっそりした女の子、そして作者の名は、いつも「へはつやま しげる」。

突如思いついた。わたくしたち姉妹は、この美しい幻想の世界に、こともあろうにヒロインとして招かれたFさんに、嫉妬していたのではなからうかと。わたくしたちが嫌ったのは、単にFさんの恵まれない環境への拒否だけではなかったのではないかと。

その後、大人になって大阪にでた彼女は、まだ若いうちに、やはり不遇のまま亡くなったときいている。そして今では、あの故郷の「通り」に住んでいた人々の大半は退場していった。三つ子の魂にまず最初に登場したのが、残酷さ、拒否感、嫉妬心などのちみもうりょうであったこと、「シンデレラ物語」のいじわる姉妹の役をやっていたことを、はからずもふるい『キンダーブック』が思いださせてくれた。しかし、この種の幼児的残酷さは、普通は次第に修正されたり抑制されたりする。悪人ゆえに救われる」という仏教の教えは、幼児教育にも共通するものであろう。

今ではFさんも「へはつやま しげる」のえがく幻想の世界のなかに安住し、わたくしの子どもの時代と共にいる。
(お茶の水女子大学)